

鷲見郷から高鷲へ拓く力(4)

【馬淵 作成】

【会報 高鷲の文化財】101号の続き

4 近代 続き

このように未開の原野から次第に姿を現した広大な開拓高原は、村民だけでなく、国や県からも注目される存在になった。そうした中、昭和34(1958)年に表面化した自衛隊の演習場問題は、開拓が軌道に乗りつつある時期に村民にとっては大きな問題であった。昭和34年1月、陸上自衛隊第10混成団から高鷲村に、東海地方と北陸地方のほぼ中央にある高鷲村の開拓高原地帯に演習場を設置したいと申し入れがあった。要望は、A案が切立・上野～鷲見の約1740ha、B案が鷲見上野(蛭ヶ野板橋地区を含む)の約1160ha、C案がA案・B案の合計約2900haの大面积で、設置後は部隊の常駐や小飛行場の開設も予定しているとして、用地買収に強い熱意を示した。

開拓の村高鷲村では最初、土地所有者らが強く反対したため断ったが、自衛隊側は県などの協力を得て立ち入り調査を進め、昭和35年には買収地域を切立地区約1400haに絞って実施調査を求めた。対象となった切立明野開拓団は県からの補助が打ち切られ、開拓営農計画に支障をきたすなど混乱した。村内でも賛成反対両派が対立する事態となり、さらに県からの強い要請を受けて大半の地区は賛成に傾き、村議会に一任した。村では自衛隊・県と協議を重ねた結果、面積を約500haに縮小することとし、同時に村民による対策委員会を設け、「自衛隊演習場設置を仮定した場合における補償要求と要望事項」を提出した。内容は譲渡価格と代償地、立退者の補償、道路整備、河川砂防工事など多岐にわたった。このように一時は受け入れに傾いたが村民の不安は消えなかった。対策委員会は地区協議会と協議を重ね、村当局も、住民の安定した生活はどんな補償条件にも変えられないと判断し、昭和42(1967)年、高鷲村として正式な断り書を提出し、自衛隊演習場問題に終止符が打たれた。



鷲ヶ岳スキー場



牧歌の里

6 現在

昭和 47(1972)年、現在の地に役場が新築され、自衛隊問題も解決すると、昭和 44(1969)年頃より「ひるがの高原スキー場」など 5 スキー場が開設され、郡上郡で一番冬の観光客(スキー客)が多い村となった。

平成 8(1996)年レジャー施設として農業公園の「牧歌の里」が開園され、村内には温泉も湧き出て観光地として一段の賑わいをみせ、さらに東海北陸自動車道(全長 185km)が平成 10(1998)年に完成し、郡上は四季を通じたリゾート地だけでなく交通の要地となり、スキー客をはじめ夏の観光客の増加している。

平成 11 年には東海北陸道が全線開通し、関西・東海・北陸からの観光客(スキー客)も増えた。行政的には平成 16(2004)年に郡上七ヶ町村が合併して、新しく「郡上市」が誕生し、初代市長に高鷲村村長の碓孝司氏になった。また、令和 6 年から切立出身の山川弘保氏が市長になっている。

鷲見郷として生まれた高鷲村は郡上市高鷲町となり、かつての行政サービスは求められなくなったが、高鷲の人達が「鷲見郷」「鷲見氏の本拠地」として誇りと郷土愛をもって生きている。



東海北陸自動車道 高鷲インターチェンジ

〔参考文献〕

- 1 郡上郡教育委員会『ふるさとをゆく 郡上郡歴史探訪』1999 年
- 2 高鷲村『高鷲年表図鑑』2004 年
- 3 高鷲村『のびゆく村 たかす』1984 年
- 4 山川新輔『高鷲村史』高鷲村 1960 年
- 5 高鷲村教育委員会『高鷲村の文化財』1993 年
- 6 たかす開拓記念館資料『高鷲村年表』2018 年
- 7 馬淵旻修「高鷲村の満州開拓」『濃飛の文化財』岐阜県文化財保護協会 2002
- 8 郡上史談会『図説郡上の歴史』1986 年